

日銀の視点

各地で、4年ぶりに、通常規模での夏祭りが戻ってきている。個人的には、「水戸黄門まつり」を初めて楽しんだ。

まず、7月29日に千波湖で行われた花火大会。全国レベルで多数の受賞歴を誇る水戸の花火会社による最高峰の花火が、広い空いっぱい打ち上げられ、変化に富んださまざまな花火を満喫した。当日の全国ニュースでは、隅田川の花火大会で持ち切りであったが、花火の質はもちろん、会場のにぎわいも、観客の満

上野 淳

日銀水戸事務所長

不要不急と侮るなかれ

足度も、負けているはずがない。

次いで8月5、6日に水戸の市街地で開催された本祭。私は、初日の夕刻から夜にかけて街歩きをしながら楽しんだ。まず、人出の多さに驚い

た。場所によっては、東京の通勤電車の車内を思い起こさせるほど。通り沿いの店舗もにぎわっていた。また、当日のクライマックスとしてみこし、山車、ちようちん行列が一堂に会する様子を目の当たりにしたが、踊り手のエ

ネルギー、笛の息遣い、太鼓のリズムに圧倒されるとともに、自然と血湧き肉躍る気分させられた。通りの各所では、老若男女問わず、外国人を含めて、それぞれに楽しんでおり、笑顔があふれていた。

・社会の活力にどれほど大きなプラスの影響を与えるものか、コロナのあの期間を経たからこそ、身をもって理解できたのではなからうか。もちろん、将来、感染症の危険度によっては、祭りなどを再び中止せざるを得ないことは起り得る。しかし、その際には、コロナ禍での経験を生かし、その負の影響を少しでも小さくする工夫を社会全体で講じていく必要がある。

た。場所によっては、東京の通勤電車の車内を思い起こさせるほど。通り沿いの店舗もにぎわっていた。また、当日のクライマックスとしてみこし、山車、ちようちん行列が一堂に会する様子を目の当たりにしたが、踊り手のエ

た。祭りは、コロナ禍当初に「不要不急」とされたものの典型だ。確かに、祭りがなくても直ちに生きていけなくなるわけではない。しかし、こうした、人々の心を動かし、つなぐ活動が、心身の健康、経済

さて、本県を含むわが国の経済は、この祭りでも見られたように、コロナ禍の下で抑制されてきた需要（ペントア

ップ需要）が顕在化する中で、改善している。ただ、物価上昇の影響も受けており、先行きのポイントの一つは、緩やかな物価上昇と、それを上回る賃金上昇の好循環を実現できるかだ。その実現に向けて現在は、デフレ期に定着した「物価や賃金が上がりにくい」ことを前提とした企業行動に変化の兆しがかがわれており、この変化の芽を大切に育てていくべき局面と考えられる。私どもとしては、政策面で引き続き役割を果たしつつ、県内においても企業の価格・賃金設定行動などを注視してまいりたい。

(今回は9月9日掲載)